

論壇

国際基督教
大学教授

森本あんり



退屈を怖れる現代人

4年に一度のオリンピックが終わった。祭りの後には日常に戻る。熱狂の裏には退屈が潜む。

現代人は退屈を怖れる。人を退屈させることは、現代の大罪である。教師は、学生を退屈させるような授業をしてはならない。牧師も、会衆を

退屈させるような説教をしてはいけない。あたかも、教師や牧師である以前に、エンターテイナーであることが求められているかのようである。

映画でも、小津安二郎のような長丁場のカメラワークはもはや見られない。「インディ・ジョーンズ」のように、次から次へとスリル満点の見せ場を作る。少しでも間延びすると、退屈が忍び寄ってくるからである。とりとめのない長話も、退屈を怖れる人の症状である。近頃では、退屈ゆえの殺人もある。退屈は、現代に蔓延する病である。

忙しいのに退屈

退屈な人は、暇な人か。そうではない。現代人は、時間をもてあましているから退屈なのではない。忙しいのに退屈しているのである。いや、退屈だから、いっそう忙しくしてしまうのである。それは、自分のやっていることに、意味や意義を見出していないからである。「こんなことをして、いったい何になるのだ」と思ってしまう自分がいるからである。

人々がこれほど退屈している社会、あるいは退屈することを怖れる社会は、いつ頃から始まったのか。実は、「退屈」という言葉は近代のイギリスに始まる。boredomとかboredという英語が最初に使われたのは、産業革命が進行していた頃から始まったのか。実

としていた」(使徒言行録17・21)。これは、退屈している人の特徴である。しかし、新しいことは、一度聞けば新しくなくなる。だから人は、ひとたびこの病にかかると、次から次へと新しいものを追い求めるようになるが、けっして満たされることがないのである。退屈は死に至る病である。

魂の安息

では、どうしたらよいのか。

退屈と安息

聖書は、「何をしたら」退屈を防げるかを教えてはくれな
い。むしろ、「何もしない」こと
を勧める。自分も、家族も、奴
隷も、家畜も、寄留者も(申命
記5・14)誰も何もしないで
いることの中に、実はもっと
も能動的なはたらきがある。

それが、「安息日」である。

安息日の教えは、わたした
ちを本当に休ませてくれるも
のが何であるかを語ってい
る。それは、自分が追い求め
て手に入れる何かではない。
安息日は、自分ではなく神が
してくださったことを、感謝
して覚える日である。自分の

ために、神がキリストにおい
て成就してくださった業を、
受け取る日である。そのお祝
いと感謝の喜びが、わたした
ちの魂をゆっくりと満たし、
豊かにし、休ませてくれるの
である。礼拝は、この意味で
やはり「神のサーヴィス」で
ある。神がわたしたちにして
くださった奉仕を覚え、それ
に感謝をする時である。

夏休みも終わり、振起日や
伝道集会で秋を迎えようとし
ている教会も多いことであろ
う。そのはたらきの上に、神
の祝福を祈る。

(もりもと・あんり)